

さまざまな経験やそのときどきの想いを
築きあげて昨日より今日、
今日より明日の人生を充実させている、
上村鮎子さんの生き方を紹介します。

One's Life

(より豊かに生きるためのヒントをお伝えします)

日本初！女性流鎧馬指導員 桜流鎧馬を世界へ発信



かみむら あやこ
上村 鮎子さん
(十和田市)

【Profile】十和田市出身。有限会社十和田乗馬倶楽部の代表取締役であり、日本初の女性流鎧馬指導員。女性騎手のみで行うスポーツ流鎧馬「桜流鎧馬」を主催し、十和田市を盛り上げている。2016年に桜流鎧馬は「第20回ふるさとイベント大賞」の内閣総理大臣賞を受賞。

スポーツ流鎧馬との出会い

かつては軍馬の育成に力を注いでいた十和田市で馬と出会い、馬で街を盛り上げようと奮闘している上村鮎子さん。高校を卒業後、建築関係の学校へ進み東京で就職。京都出身の夫との結婚を機に、子育てをするなら青森で生活をする方がよいと考え、22歳の時にUターンしました。東京から戻り、両親が経営する会社でルーティングの仕事をしましたが、会社の組織に馴染めずに間もなく部署異動。「たぶん生意気だったんですよ」と当時の自身のことを振り返ります。異動先は馬部（十和田乗馬倶楽部の前身）で、この時から馬との関わりがスタート。2000年、父親や地元有志が集まり、南部駒で栄えた南部地方で、生きた馬を使って、もう一度観光で盛り上げようと立ち上がりました。2002年、神事ではない「スポーツ流鎧馬」を乗馬倶楽部のサービスマニュアルに加え、2003年には女性だけが出場できる桜流鎧馬大会を始めます。

しかし、本来、流鎧馬は神事で男性のみが行う女人禁制の世界。盛岡八幡宮の大会で、師範の導きにより女性で初めて神事の流鎧馬に立つた後に、「女のくせに」と女人禁制の世界で走ったことや派手な衣装のことをいろいろと言われました。「男性が守ってきた伝統の意味を理解した上で自分の意見を持っていければ反論できたかもしれない」。上村さんの中に反論する意見が持てず「なぜだろう」と答えが見つからない日々が続きました。

たくさんの人に支えられて 吹っ切れた

2011年3月11日の東日本大震災では、本社の営業先が被害に遭い、本社は一時閉鎖を余儀なくされました。それに伴い、乗馬倶楽部も閉鎖の危機に。流鎧馬に関わっていた方々から「4月の桜流鎧馬をやってほしい」という声が上がりました。「悩むくらいなら何とかやってみようと思うんです」。この時、上村さんは本社から独立して乗馬倶楽部の代表を務めることを決意しました。

目の前のことに精いっぱい向き合い、一生懸命やっていくうちに、周りの愚痴や文句も意見として受け入れられるようになりました。「たくさんの人たちに支えられたという実感から、大変だとは思わなかった。やればなんとかなると思った」。福島で被災した方も受け入れ、この年4月の桜流鎧馬大会は開催されました。

現在、桜流鎧馬の大会は16回を数え、この他に世界流鎧馬選手権を開催するなど、十和田の地で精力的に活動を続けています。この間、さまざまな分野の人たちとの出会いがあり、大会運営も「するもの」「見るもの」「支えるもの」の大きなチームだと気づきました。

「するもの」とは、選手だけでなく流鎧馬の技術指導を確立して指導員を育成することを意味

し、さらに全国へ発信することも目指しています。「するもの」「選手」と「見るもの」「観客」をつなげるために、フォトコンテストを行い、翌年のポスター選考の企画も実施しています。「たまたま私は大きなチームの代表という立ち位置だけど、それぞれがプロフェッショナルに近くなれば良いものになっていく」と話します。桜流鎧馬は地域活動へも広がりを見せ、衣装は地元の裁縫が得意な女性たちが昔の男性用の伝統装束の図面を解体し、伝統を踏まえつつ現代の要素も取り入れて、女性が一日着用しても疲れにくいものへと進化させました。そして、桜の季節にもっとピンク色を増やしたいという願いは、乳がんの「ピンクリボンキャンペーン」の啓発活動へも広がっています。

これからのビジョン

現在、子育ては一段落し、オフの日は弓道やジム、買い物と自分の時間を過ごしています。子育て中は子どもの部活の試合に応援に行けないことも多く、子どもたちには寂しい思いをさせてしまったと感じたこともありました。しかし、ママ友たちに支えられ、地元で子育てができてよかったと思っています。

上村さんは自分が現役選手として価値があるうちに、見に来てくれる方々とコミュニケーションをもっと深く取りたいと思っています。また、大会を支えるボランティアなど馬に乗らない人たちに、馬の文化を伝えるため、高校生の協力を得て、情報発信することをはじめました。その他、日本初の女性流鎧馬指導員として、プレーヤーを育てること、海外にも日本の馬の文化を伝えたいという思いがあります。

桜流鎧馬は、今後、新たな文化として、ますますこの地に根付いていくことでしょう。

(取材：吉町 友美)

